

No. 338【2019年1月4日配信】

森山弥七郎と森山内蔵之助 その2 (担当:工藤)

新年明けましておめでとうございます。室長の工藤です。

昨年末、12月21日の配信で紹介したように、私たちが「森山弥七郎」として知る人物は、同時期に森山姓を名乗る人物「内蔵之助」と同一人物とみなされていますが、その理由は合理性を欠いている…と、指摘しました。

ここで、一つ史料をご紹介します。それは弘前藩庁が文化3年(1806)の初代藩主為信の200年忌の際に作成した「由緒書抜」に収められている、森山九左門家の由緒書です。森山家の本家は、寛政9年(1797)に暇を出されており、九左衛門は森山家の分家(3代目の次男の系統)となります。

この由緒書によれば、初代は阿保中務といい22歳の時の大光寺合戦で戦死します。このとき彼には2歳になる息子・内蔵之助がいて、父・中務の死後は母の父親に預けられ17歳まで育てられます。この内蔵之助が2代目となります。

内蔵之助はその後為信の小姓に召し抱えられ、為信から「森山内蔵之助信実」という名前をもらい阿保姓から森山姓となります。ちなみに、信実の「信」字は為信の一字拝領と記されていますが、そこは由緒書ですから割り引いて読まなくてはならないでしょう。そして、3代目に弥七郎という人物が登場します。彼の事績はまったく記されていませんが、寛文9年(1669)に次男が藩庁に召し抱えられ、これが九左衛門の直接の先祖となります。

この由緒書をもとに考えると、油川の浄満寺の供養碑に刻まれた「元祖森山弥七郎」は、由緒書でいう3代目の弥七郎だろうと考えます。寛永3年(1626)に青森の町立てを指示されたのもこの人物でしょう。そして、寛文6年2月に亡くなったことが「弘前藩庁日記 御国日記」(以下、「国日記」)に明らかである「内蔵之助」も同一人物だと思います。つまり、弥七郎は親である2代目の「内蔵之助」を継承していたのです。このことは、寛文4年から「国日記」に現れる森山弥七郎(3代目の弥七郎の息子だと思われます)が傍証になると思います。ですから、供養碑に刻まれた「元祖」という文言は、森山本家が「弥七郎」を少なくとも何代か継承したことの表れと見立てています。



森山弥七郎供養碑
(浄満寺)

実は、これまでの説は由緒書でいう2代目の内蔵之助(信実)と3代目の弥七郎とを同一視していました。人名事典が「森山内蔵之助信実」で項目立てをし、弥七郎を幼名と解釈したのがその端的な例で、しかも彼は90歳を超える長寿だったのです。もちろん、藩政時代の長寿を否定するつもりはありませんが、この場合は2代目の生年から3代目の没年までを一人の「森山内蔵之助」の生没年としたために、かくも長寿な人物が誕生したのでした。